

しいのき



鷺宮の長屋門

名誉館長 三 隅 治 雄

世の中、思いがけない場所に思いがけぬものを見て、おどろくことがあります。区内でも武蔵野のおもかげをとりわけ残す鷺宮は、妙正寺川筋の低地は水田、丘陵地は畑が広がって、江戸時代には米・麦・午芻・大根・豆類など豊富に生産しては江戸に送る農村として栄えたところですが、その農村の一農家の入口に、堂々たる武家の長屋門が建って、いまにそれが残っているのです。旧家の篠崎家の入口にあるのがそれで、門の向かって右側に納屋が、左側に蔵屋が設けられ、それらがひとつ屋根でつながっています。蔵屋は元米穀の貯蔵、納屋は諸道具の収納に当てたのを、篠崎家では沢庵漬と、漬物作業人の宿泊所に転用しました。江戸時代後期、当地を領した今川家に野菜を納めて親しくしていた篠崎家の当主が、今川家家臣の某氏から浅草阿部川町にあった邸の長屋門を譲り受けたと申しますが、身分差きびしい封建時代に武家の門を構えた鷺宮大百姓の気概が偲ばれて、愉快です。近く取り壊されるそうで、武蔵野がまた変わります。

文化財よもやま話

富士講

毎年夏になると、以前は区内の妙正寺川などで、富士登山に先だち裸になって「懺悔、懺悔、六根精浄」と唱えながら水垢離を取る富士講の代参者達の姿が見られたそうです。

日本では古くから山は神が宿る神聖な場所として考えられていました。江戸とその周辺の人々にとって、毎日美しい姿を目にすることのできる富士山は親しみ深い霊山の一つで、一生に一度はその頂きに登り神に見えたいという想いを誰もが抱いていました。しかし交通の未発達な時代に富士山に登るには大変な日数と費用を要します。そこで組織されたのが、講金を出し合って富士山に参拝する富士講です。この富士講は特に江戸では盛んで、「八百八講」と言われるほど沢山の富士講がありました。講では毎年富士山への代参者を籤で決め、夏になると代参者は先達に導かれて富士山に向いました。また誰もが富士山に登れるようにと富士山を模した富士塚も作られました。

中野区内でも富士講は盛んで、鷲宮、江古田、上高田、新井などの富士講は月三惣元講という講社に属していました。さる6月に当館で行われた寄贈資料展では、鷲宮の篠崎家から寄贈された明治期の富士講の資料が展示されました。中でも珍

しいのは大マネキ(写真)で、これは高さ4mを越える講社の旗です。「十七夜同行」と書かれているのは、毎月17日の夜には法会を行っていたことを示しています。また富士登山や講の祭りの際に着用した白装束には、富士山参拝の証しとして沢山の印が押ししてあります。これらの資料は富士講の具体像を知る上での貴重な手掛りとなります。



大地に眠る歴史

台所物語 1 (集石炉)

私達が、普段何げなく使っているガスコンロ、電気炊飯器、今では台所もとても便利になりました。しかし、この便利な道具も、人類の歴史とともに数万年かけて発達してきたものです。今回からは、遺跡から発見される台所の歴史をたどってみたいと思います。

富士山が噴火していた今から約12,000年程前は空は火山灰でおおわれ、晴天の少ない日々でした。気温は今より数度低く、中野一带は針葉樹のうっそうとした森が続いていました。人々は狩りをしながら食糧を求め、森の中をさまよって暮らしていました。気温が低いこともあり食べられる植物は少なく、動物が主な食糧だったのです。その日の獲物を石器で切り分け、焚火(炉)で焼いて食べるのが日々の暮らしだったのです。この焚火こそが人類最初の台所と言えましょう。しかし、焚火でじかに物を焼きますと表面は焦げつき、とても食べるのに苦労します。人々は、あまり焦げずに中身まで火がとおるにはどうしたらよいか、考えたことでしょう。



中野城山居館跡で発見された集石炉

そこで工夫・考案されたのが集石炉なのです。集石炉では、石を集めてその上で焚火をして、熱した石の上で食糧を焼く、もしくは、土をかけ蒸す方法で、熱効率が高く、肉などの調理に適したものでした。この集石炉は、先土器時代から土器が発明された縄文時代草創期・早期・前期頃まで盛んに使われていました。(つづく)

***** 1992年指定文化財紹介 *****

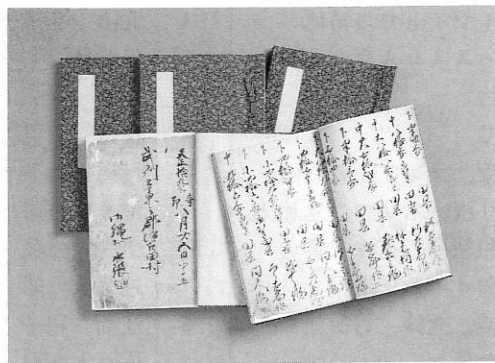
1992年指定文化財が、中野区文化財保護条例第19条の規定により、中野区文化財保護審議会（会長三隅治雄）で検討し、教育委員会で、下記のように決定しました。

指定文化財

◎堀野家文書

所蔵者 堀野新治 江原2-24-22

解 説 江戸時代の中頃から旧江古田村の名主を勤めていた堀野家の所蔵する文書です。中野地域で最古の検地帳（天正19年）をはじめとして、年貢関係の資料などが揃い、江戸時代から明治にかけての江古田村の様子を体系的に知る上での貴重な資料となっています。

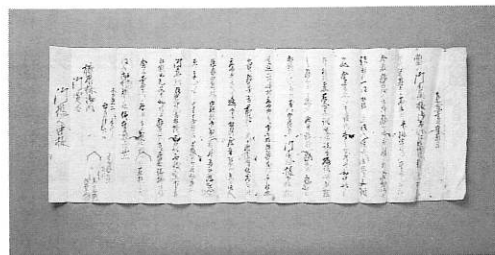


▲堀野家文書（江古田村検地帳）

◎深野家文書

所蔵者 深野誠一郎 江古田1-20-15

解 説 最も古くから旧江古田村の名主を勤めていた深野家に伝わる文書です。徳川家の重臣榊原家への出入り関係文書などが残っており、近郊農村と都市や武家との関係を示す重要な資料として、これまで数多くの歴史学者の研究に利用されてきました。

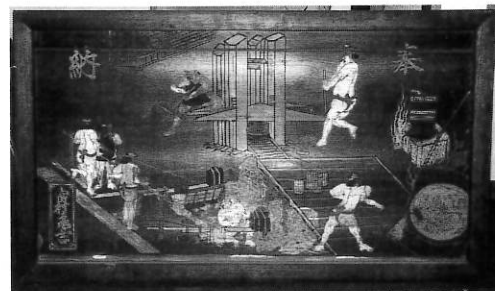


▲深野家文書
（作法替に付下掃除相続様願）

◎沼袋氷川神社所蔵絵馬37点

所蔵者 氷川神社（沼袋） 沼袋1-31-4

解 説 明和元年(1764)から昭和6年までの間に氷川神社に奉納された絵馬で、一か所にまとまった絵馬としては区内で最も数の多いものです。菜種油の製作過程を描いた産業図や武者絵、参詣図など画題や形態も様々で、絵馬研究の資料として重要です。

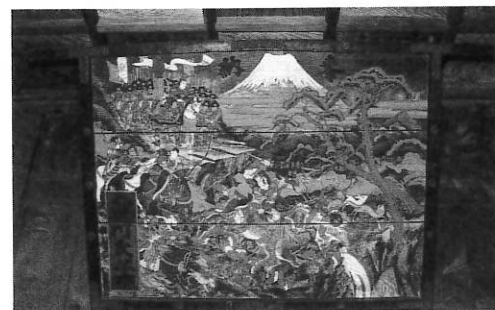


▲氷川神社絵馬（産業図）

◎多田神社所蔵大絵馬3点

所蔵者 多田神社 南台3-43-1

解 説 区内最大の大絵馬である『壇ノ浦合戦図』、大絵馬に特徴的な画題の『富士の巻狩図』（共に年代不詳）、大正13年に奉納された『十番組まといの図』の3点があります。大絵馬は区内に僅かしか残っていないため、これらは大変に貴重です。（敬称略）



▲多田神社絵馬（「富士の巻狩図」）

寄贈資料一覧

敬称略・受入順

資料名	点数	氏名
債券	11	大江 ひで
雛人形	1式	矢島 幸雄
アルマイト弁当箱他	3	丸山 幸三
ケース入り人形	1	近藤ひで子
着物	1	斉藤 甲子
こて	1	伊藤 明美
裁板、ランプ、鉄釜他	7	杉田 薫子
はり板、米びつ、鬼瓦他	4	佐々木泰司
昭和初期の花嫁衣裳	1式	伊藤 徳蔵
昭和4年測量地図	1	近藤政太郎
長持、火鉢、石臼他	125	江橋 利子
鏡台他	2	佐々木泰司
地下鉄開通記念切符	1	渡辺 幸雄
盆他	3	深沢 和子
こたつ、火鉢	2	小西 秀昭
井戸の滑車	1	松 源 寺
信玄袋他	4	林 千鶴子
木炭、豆炭一式	1式	岡村 義夫
書籍	3	宮本 端夫
書籍	7	松本源之助
吸入器	1	岩淵 文人
韓国の暦、算木	2	宮崎 勝弘
五月人形	1式	平野 進
謄写版原紙	1	根津 力三
削り器他	3	奥泉 正一
棒秤、布房	3	山口 行夫
雛祭り用重箱	2	小原 せん
雛人形	1	伊藤 イク
教科書、防空頭巾他	8	沢田千鶴枝
花立て、トランク	2	坂井 照
五月人形、トランク他	4	北浜 清子
雛人形	1	金子人形製作所
京焼茶碗、茶たく	6	坂井 照
富士講装束、祭具	1式	篠崎 吉紀
書籍	19	白井千代松
大内雛	1式	愛宕 昌子
手押し式消防ポンプ	1	飯田 照夫
手作り雛人形	1式	秋山 浪子
雛壇	1	近田 一郎
トランク、やかん他	5	早水 幸一

資料名	点数	氏名
雛人形	1式	小林 豊作
書籍	1	野口 一郎
書籍	1	田中 敏雄
神輿、樽神輿、錫杖他	9	江古田 <small>四日市</small> 郡 <small>岩崎</small> 会
『参宮の栞』	1	早川 利雄
唐鞆、むしろ編み機他	34	篠崎 吉紀
フレット	1	小野寺 実
正月しめ飾り	1	俵 有作
醤油入れ	4	根津 力三
瀬戸樽（醤油樽）	1	中俣竹太郎
瀬戸樽（醤油樽）	1	松原 芳
たらい	1	望月友次郎
壺、皿、木魚、写真他	9	水野 繁
書籍	3	渡辺 幸雄
裁板、くけ台、へら他	55	松尾ちる子
謄写板	1	根津 力三
斧、押切り、鋏他	5	寺尾 徳樹
五月人形	1式	平野 進
日本剃刀、紅さし	2	佐藤 知子
郷土人形	300	北村建次郎
人形の着物	3	猪田 尚宏
浮世絵（国周）	5	木下 茂
アンソニーのカメラ他		田中 明
狛犬	1対	北村建次郎
秤	1	小沼 純子
日本人形、羽子板他	6	原島 寿子
奉納扁額、弁当箱	25	福 蔵 院
五段重	1	愛宕 通幸
たんす	1	福 蔵 院
蠅取り器	1	伊藤 徳蔵
世界地図、書籍他	80	鈴木鋭三郎

◎貴重な資料をありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

句集「椎の実」より
夏の雲動くや太陽むき出しに
山崎千枝

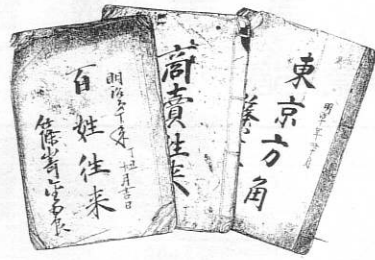
古文書つぶり

おうらいもの 往来物—教科書—

旧家の古文書を調査していると、「往来物」と呼ばれる木版本や手書きの清書された文字の寺子屋時代の教科書が、よく見受けられます。

もともと往来物は、平安時代末期以来ひろく一般に普及した初等教科書で、手紙文を基本としていました。時代がくだるにつれ、手紙に使われる単語や短文の例などを内容とするものをはじめ、さまざまな内容を持つようになり、江戸時代には寺子屋などの普及にともなって、内容的にも多様性を増し、7000種にも達したといわれます。これらは社会生活上の知識や心得の修得に重きをおいたものと、習字用に字尽し、名寄せの形式をとったものに大別されますが、両者ともに実用的知識の修得という点では共通しています。

中野区域でも江戸時代後期になると、ほとんど各村に寺子屋ないし家塾が開かれています。そこでは、古典的な庭訓往来、消息往来をはじめ、百



▲代表的な往来物

姓往来、商売往来、方角往来などのほか、『名頭』などのように、「……往来」という名称ではないものの、同種の教科書も使用されていました。

最近、篠崎吉紀氏（鷺宮1丁目）から当館へ、鷺宮八幡社の神官であった篠氏の主宰する家塾と双鷺学校で使用されたと考えられる往来物・教科書、数十冊が寄贈されました。これを見ると、同名のものでも多様な内容をもっていることが分かり、学習の具体的なようすを知る手がかりを与えてくれます。そればかりでなく、これらが近代教育のもとで「習字」や「修身」に引き継がれていったことも知られ、近世から近代への転換と連続面を浮き彫りにする貴重な史料となっています。

中野往来

「中野を読む」編集雑記

「中野を読む」という小冊子を編集するため数多くの江戸時代の史料を読みましたが、残念ながら中野が紹介されているものは少なく、それは中野が御府内ではなかった為であると思われます。

当時、江戸のことを江戸ともいい、江戸の区域内を御府内といいました。しかし、その範囲は幕府内部でもまちまちで、そこで作成したのが今日も残る「御府内外境筋絵図」です。それによると西は角筈、落合村、今の新宿かぎりとなっており中野は線外なのであまり話題にならなかったでしょう。

江戸の花といわれた大火、地震、落雷などの話はたくさんありますが、大抵新宿までです。宝仙寺落雷、鍋屋横丁、新井薬師の火災等数少ない貴重な記録です。近郊農村で家が少ないため大火がなかったことは考えられるとしても、地震、雷が新宿でとまったとは考えにくいと思います。

中野昔話

水溜りをおお深い

ご馳走もらって帰ってきたらば、いつも水のないとこなのに水がたくさん出ててね、そうしてね、尻をはしょって、そいで「おお深い、おお深い」と思って、その水溜りをね、渡ったんですって。渡ったらばそのうちに、ずっと水がなくなって、そうしたら持っていたご馳走もなくなったんですって。

ですから、狐がそのご馳走をとるために、水を出したように見せて。着物をこう上げますからね、手がふさがりますでしょ。その間にとったんじゃないかなんていう話をね、聞いたことがありました。

おばあちゃん(姑)から聞きました。

(上高田 女 明治43年生)

『中野の昔話・伝説・世間話』より

事業報告

各種事業経過

1992年4月～6月

事業名	内容	期間
企画展	「豊原国周浮世絵展」第1期	4/21～5/2
	第2期	5/3～5/16
	「寄贈資料展」	6/3～6/30
各種事業	「なかの史跡めぐり」上高田コース 「体験学習拓本教室」	4/26 6/27・28
文化財調査	鷲宮地域民俗調査 若宮一丁目民有地試掘	4/1～ 4/8

次回企画展のお知らせ

『台所 お勝手のいま・むかし』

住まいを考える上で、台所はなくてはならない存在です。そして、その起源は人々が火を使って食物を調理加工した古代にまでさかのぼることができます。炉から竈、そして、戦後の女性の地位向上とともに台所は著しい変化を遂げてきました。今回の企画展では、こうした台所の変化発展について、歴史的に見ていきます。

また今回は、囲炉裏まわりや昭和30年～40年代にかけての台所などを復元。懐かしいお釜や飯櫃、足付まな板などの台所用品を初めとして、ガス器具の初期のもの(明治時代)や世界の台所のミニチュアなども展示します。

期間：10/1～11/14。入場料 100円



◀ おもちゃ絵にみる台所
『志ん版かつての道具』(明治15年)

NEWS

* 郷土学習相談室を開設

8月18日から21日まで、区内在住の小中学生を対象に郷土学習相談室を開設し、中野の歴史に関する御質問にお答えいたします。相談の時間は10時から12時までと、1時から3時まで(受付は9時30分から)です。

NEWS



▲ 寄贈資料展

入館状況

1992年4月～6月(76日間)

(人)

一般	行政視察	学校教育	合計
10,290	72	918	11,280

発行年月日 1992年8月1日

編集・発行 山崎記念
中野区立歴史民俗資料館

〒165 東京都中野区江古田4-3-4

☎ 03(3319)9221 FAX 03(3319)9119

(印刷物登録番号 4中教社社第4号)